

世界の水

水辺空間を生かした都市再生の事例
—ヨーロッパ(その9)—
北欧・スウェーデンからノルウェーへ

工学博士・元大阪産業大学教授
なかの まさひろ
中野 雅弘



はじめに

今回はスウェーデン南端のマルメを出発して北上し、第2の都市のヨーテボリを訪れて、その後、西側隣国のノルウェーに向かいます。両国は北欧に属するいわゆる高福祉社会を実現した国で、治安が良く、人々が穏やかで親切的な雰囲気は同じですが、かつての北欧の覇権国であるスウェーデンと漁業が盛んなノルウェーとは少し雰囲気が異なるように思います。

1. 歴史ある旧市街地の運河と町なみ、スウェーデン(ヨーテボリ)

スウェーデン南端の町のマルメから

3. 急こう配の鉄道でフィヨルドに向かう、フロム線とフィヨルド

泊したヨーテボリから急行列車でノルウェーのオスロに向かいます。オスロへ北に向かう列車内はさすがに客数が少なくなりますが、車窓から見るスウェーデンの山園風景は麦畑と牧場(牛)が続き、家々もカラフルで美しいです。オスロには夕刻に到着しましたが、ホテルまでの時間に閉館間際のムンク美術館を駆け足で訪れました。オスロで、泊した翌日の朝、ベルゲン急行でベルゲンへ向かいます。途中のミュールダール駅でフロム線に乗り換ええます。フロム線では、列車は線路の下り勾配のカーブを利用して速度制御しながら高さ800mを下ります。この技術はノルウェー鉄道の自慢のようです。途中の水量の多い川(シヨース逆)で15分ほど一時停車した後、10分足らずでフロム駅に着くと200名ほど乗れる中型の船が待っています。この船はフロムからグドヴァンゲン行きフェリーで、ノルウェーで一番長いゾグネフィヨルドの支流であるアウルランフィヨ

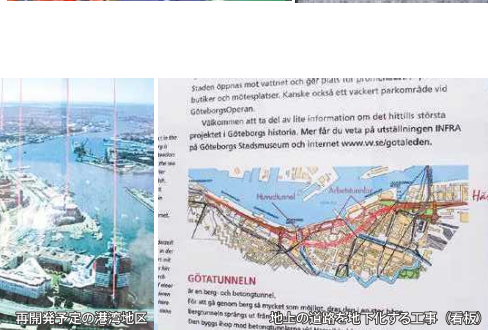


ヨータ運河 (繪に1878年の刻印)



観光用のクルーズ船

運河には保存された水門



再開発予定の港地区



ら鉄道にて、スウェーデン第二の都市である自動車のボルボで有名なヨーテボリを訪れました。この町は度重なるデンマークとノルウェーとの戦争の末に、ようやく北海への出口としてのこの地を手に入れ、町の北を流れるヨータ・エルヴァ川に沿って繁栄しました。特に大航海時代は貿易の拠点として栄え、現在は美しい海と市内にはヨータ運河があります。運河沿いには、18世紀の大

2. 都心の賑わいと港湾地区の水辺を結び、スウェーデン(ヨーテボリ)

ヨーテボリ中央駅から地下道で結ばれた大型ショッピングモールがあり、多くの人で賑わっています。モールを出てさらに町を歩いて行くと大規模な工事の説明の看板を見つけ

ルド中を、約2時間ですがゆっくり静かに入ります。グドヴァンゲンで船を降りるとバスが待っていて、その後20分くらいでヴォスに着き、そこでベルゲン線の列車に乗り換え約40分でベルゲンに着きます。この間いくつかの乗り物を使い換えますが、手際よくこのルートの観光が楽

4. ハンザ同盟で栄えた海辺の町、ベルゲン

ベルゲンはノルウェー第二の都市でフィヨルド観光の玄関口としても知られ、その歴史は古く、12世紀から13世紀にかけてノルウェーの首都が置かれました。さらに17世紀にハ



急勾配を下る列車

ミュールダール駅でフロム線に

オスロ駅からベルゲン急行に

途中の川 (シヨース逆)

アウルランフィヨルドを通過

しめるようになっていきます。ハンザ同盟が終焉を迎えるまでの400年間にわたって繁栄を謳歌し、そのベルゲンの中心地であった場所が海際の旧市街にあるブリッゲン地区です。ブリッゲンの木造家屋はハンザ商人が建てた商館で、当時は倉庫や事務所および住居として使われ、切妻屋根のカラフルな木造倉庫が並ぶこの地区は世界遺産にも登録されています。ベルゲンは都市でありながら、風光明媚な箇所が多く、特に港湾地区は観光客も多く、落ち着いた賑わいを感じさせてくれます。日本から少し離れていますが、再度訪れてみたい町の一つです。

おわりに

今回は高福祉社会を実現した北欧のスウェーデンとノルウェーの二か国での水辺を生かした都市の再生事例をご紹介しますが、どちらも歴史や文化を活かしつつ、残された自然を残しながら、人々がそれを楽しめるような工夫がなされている点に印象に残りました。これらのことから、その地域に住んでいる人々が訪れる人々が共に賑わいと安らぎを感じる事ができる町づくりと地域づくりの人切さを改めて感じました。